

Split Minimal Search

森竹 希望

1. 導入

本論は Locative Inversion(LI)や *there* 構文における一致と格付与に関する考察を行う。(1)から(4)に本論が説明対象とするデータを示す。(1)、(2)が LI、(3)、(4)が *there* 構文のデータである。

- (1) In the garden stand/*stands two fountains. (Levine (1989: 1015))
- (2) Under the garden wall sat I/*me. (Levine (1989: 1045))
- (3) There are/*is several cats in the backyard. (Sabel (2000: 412))
- (4) There is only me/*I in the garden. (Sobin (2014: 386))

2. 先行研究とその問題点

Chomsky (2000)の probe-goal Agree、Epstein, Kitahara, and Seely(EKS) (2017, 2018, 2019)の label に基づく一致と格付与の提案にはそれぞれ問題がある。前者に関しては、EKS (2017, 2018)が述べているように厳密には c 統御関係がなくとも一致が起こる点が挙げられる。後者に関しては、feature valuation が Minimal Search(MS)により付された label に基づき morpho-phonological component で行われるとしていたが、LI では label に基づかない一致や格付与が行われているはずであり、EKS (2017, 2018, 2019)の提案を一部修正する必要がある。

3. 提案

本節はまず以下の三つを提案する。

- (5) Feature valuation は Minimal Search に付随して narrow syntax で起こる。
- (6) Split Minimal Search
Minimal Search が行われる過程で、Person-feature と Number-feature のそれぞれが局所的に探索される。
- (7) Case は Minimal Search の反映として値を与えられる。

前節で EKS (2017, 2018, 2019)の提案の問題点を挙げたが、MS は feature valuation の必要条件であることに変わりはないため(5)は自然な帰結となる(Kinjo (2018)も、細部に違いは見られるものの、feature valuation は MS の結果生じることを提案している。)。 (6)に関しては、Sigurdsson and Holmberg (2008)など多くの先行研究で述べられているように、Person-feature と Number-feature の一致は別個で行われると想定し、その分析を MS に置き換えて提案したものである。ただし、‘Split’と表記しているが、MS 自体は一つの操作であり、MS が行われる過程で feature ごとに局所的な関係を構築することで feature valuation が起こると想定する。(7)は、Chomsky (2000)の格付与は一致の反映として起こるとする提案を本論の枠組みで捉え直したものである。本論では一致、つまり feature valuation は MS の結果生じるため、(7)は自然な帰結となるはずである。

これらの提案に基づき、まず LI を考察するが、(1)の派生を示した(8)を参照されたい。本論では、EKS (2016)に従い、非対格動詞は R と v*が external pair-Merge を経て派生に導入されると想定する。

- (8) $\{c C \{_{\gamma} \{\beta \text{ In the garden} \} \{T T_{[u\phi i]} \{<R, v^*\> \text{ stand two fountains}_{[v\phi i]} \} \} \} \}$

この時、MS により T の持つ[uphi]と意味上の主語の持つ[vphi]が探索され、feature valuation が起こる。その結果、動詞には三人称複数形の屈折が現れる。さらに、T の持つ[uphi]と意味上の主語の持つ[vphi]の完全な feature valuation により意味上の主語には主格が与えられることを予測することができるが、それは(2)から正しい予測であることがわかる。次に *there* 構文を見るが、(3)の派生を示した(9)を考察する。

- (9) $\{c C \{_{\gamma} \text{ there}_{[3-Person]} \{T BE=T_{[uPerson], [uNumber]} \{<R, v^*\> BE \text{ several cats}_{[3-Person], [Pl-Number]} \text{ in the backyard} \} \} \} \}$

この時、(6)に基づき、MS が生じる際、T の持つ[uPerson]は *there* の持つ[3-Person]により値を得る。一方で、T の持つ[uNumber]に関しては、*there* が当該の feature を持たないために探索は下位へと続き、*several cats* の持つ[Pl-Number]から値を得る。結果として(3)の屈折は正しく予測できる。ここで、(4)を見ると、*there* 構文では LI と異なり、意味上の主語に対格が与えられていることがわかる。Chomsky (2000, 2001)によると、defective な phi-feature による Agree では格付与はなされない。本論の提案では、MS が意味上の主語と T の Number-feature のみを探索し、feature valuation を行なっている。つまり、意味上の主語に対する MS は、LI で起こるものとは

異なり Person-feature を欠いていることから defective であるとみなすことができる。従って、完全な feature valuation ではないため、デフォルト格として対格を得ると提案した(デフォルト格に関しては Schütze (1997, 2001)他を参照。There 構文の意味上の主語がデフォルト格を得る可能性に関しては Sobin (2014)、森竹 (2021)も同様の議論を行なっている。)

4. アイスランド語

アイスランド語では、(10)が示すように与格主語が用いられるが、目的語が存在する場合、その目的語は主格として具現化する。この時、T の持つ[uNumber]は与格主語ではなく、主格目的語と一致する。

- (10) Henni leiddust strákar/þeir.
her-Dat bored-3Pl the boys-Nom/them-Nom
'She was bored with the boys/them.'
(Richards (2008: 187))

本論では、Richards (2008)に従いアイスランド語における与格要素は[3-Person]を持つと想定する。さらに、EKS (2016)に従い、アイスランド語において主格目的語が用いられる場合は、R と v*が external pair-Merge を経て派生に導入されると想定する。本論の分析を援用すると、(10)は(11)で示される派生となる。

- (11) {C C {_γ Henni_[3-Person] {_β T_{[uPerson], [uNumber]} {<R, v*> leiddust strákar/þeir_{[3-Person], [Pl-Number]}}}}}

まず、与格主語は[3-Person]を持つため、MS により与格主語の[3-Person]と T の[uPerson]が探索される。その結果、T の[uPerson]は[3-Person]の値を得る。また、Split Minimal Search により、T の[uNumber]と目的語の[Pl-Number]が探索され、T の[uNumber]は[Pl-Number]の値を得る。また、この時 defective な MS ではあるが、目的語が主格として具現化する。本論は Schütze (2001)、Thráinsson (2007)に従い、アイスランド語では主格がデフォルト格であると想定する。従って、defective な MS により目的語が主格として具現化することは問題ない。

興味深いことに、与格要素が T の c 統御領域に存在する場合、(12a)が示すように T と従属節内部の主格目的語の一致が阻害されているように見えるが、当該の与格要素が主節の主語位置へ移動した場合、(12b)が示すように主節の T と従属節内部の主格目的語が数の点で一致できる。

- (12) a. Okkur virtist/*virtust [heeni hafa leiðst þeir].
us-Dat seemed-3Sg/3Pl her-Dat to-have found-boring they-Nom
'It seemed to us that she had found them boring.'
(Sigurðsson (2000: 99))
b. Jóni virðast/*virðist [ti vera taldir líka hestarnir].
Jon-Dat seemed-3Pl/3Sg to-be believed like horses-Nom
'Jon seems to be believed to like horses.'
(Schütze (1997: 107), judged by Thráinsson))

Sigurðsson and Holmberg (2008)は、(12a)を Complex ECM と表現しているだけでなく、太字で示した与格主語 henni 'her'は不定詞節の主語として機能すると述べている。

しかし、Zaenen et al. (1985)らが指摘するように、単文節では与格要素が T の c 統御領域に存在したとしても、T と主格要素との一致が阻害されない。

- (13) það voru konungi gefnar ambáttir í vettur.
EXPL were-3Pl king-Dat given slaves-Nom in winter
'There was a king given maidservants this winter.'
(Zaenen et al. (1985: 462))

ここで(12a)と(12b)の違いを整理すると、Sigurðsson and Holmberg (2008)に従えば、(12a)は ECM 構文であり、(12b)は Raising 構文となる。一般的に、ECM 構文では主節の v*P が phase を構成するが、Raising 構文ではそうではない。さらに、Chomsky (2000)以降、上位の phase で行われる統語操作は下位の phase 内部には適用できないと考えられている(Phase Impenetrability Condition(PIC)(Chomsky (2000))). 従って、もし、(12a)において主節の v*P が phase を構成しているならば、主節の CP レベルで行われる MS は PIC により従属節内部にアクセスすることは不可能となる。故に主節の T の持つ[uNumber]はデフォルトとして単数の値を得る。一方で、(12b)では主節の v*P が phase を構成しないため、主節の CP レベルで行われる MS が、PIC に違反せずに従属節内部にもアクセス可能となる。故に、主節の T の持つ[uNumber]は主格目的語の持つ[Pl-Number]と同じ値を得る。

<主要参考文献> Epstein, Samuel D., Hisatsugu, Kitahara, and T. Daniel Seely (2019) "Unifying Labeling under Minimal Search in "Single-" and "Multiple-Specifier" Configurations," *Coyote Papers* 22, 1-11. / Richards, Marc D. (2008) "Quirky Expletives," *Agreement Restrictions*, ed. by Roberta D'Alessandro, Susann Fischer, and Gunner Hrafn Hrafnbjargarson, 181-214, De Gruyter, Mouton. / Schütze, Carson (2001) "On the Nature of Default Case," *Syntax* 4, 205-238.